びぶりおてか

同志社大学図書館報 №31. 1982. 4. 1

一　冊　の　本

工学部長　谷　口　一　郎

現在の教養課程の1～2年生は私達の年代では旧制高校の2～3年生に当る。私自身がその頃に読んで，いまでも心に印象づけられているものの一つとして，高木貞治著「近世数学史談」をあげたい。

著者の高木貞治氏は類体論の創始者として，また文化勲章の受賞者でもあり，その著「解析概論」は非常に良く知られている。

近世数学史談は19世紀ヨーロッパでの数学者の列伝ともいうべきもので，ガウスを中心に，コーシー，アーベル，ガロア，ヤコービ，ヂリクレ等の逸話や業績が興味深く書かれている。

このうちガウスは統計でのガウス分布や最小二乗法で，またポテンシャル論でのガウスの定理で我々になじみがあり，コーシーは複素函数論でのコーシーの定理で，またアーベルは5次以上の方程式の代数的解法の不可能性の証明やアーベルの定理その他でよく知られている。

近世数学史談は，「1796年3月30日の朝，19才の青年ガウスが目覚めて床から起き出ようとした瞬間に，正17角形の作図法を思いついた」という書出しで始まっている。伝説によれば，正17角形の作図法の発見はガウスをして数学を専攻する決心をなさしめた動因であるという。ガウスが数学者になったか，ならなかったかは，19世紀以後の数学にとって致命的な問題であったから，1796年3月30日という日に非常に大

目　　次

一　冊　の　本……1
実例を中心とした資料のさがし方……3
く　り　ご　と……5
ブック・ディテクション・システム
（B.D.S.）について ……6
仏教に関する二次文献……8
貸出しについて思うこと……12
ピックアップ
「立志社始末記要」について……13

きな意義があると著者は考えるのである。

ガウスは1795〜98年までゲッチンゲン大学に在学し，1799年に学位を得て，その後1807年までブラウンシユワイヒに在って，当時のフエルヂナンド侯の知遇の下に研究に専心している。ガウスはこの処士時代を生涯で最も多幸なる時代といっている。数学の考究にあっては，何よりも妨げられざる，切り刻まられざる時間が必要であると。

1807年以後のゲッチンゲン大学数学教授兼天文台長としてのガウスは，もはや妨げられない，切り刻まれない時間に恵まれなかった。天文台といっても観測から計算まで台長が殆んど一手で行うのである。その上に大学の講義がある。「虚定に漂う精霊の影を捉えようとして頭が一杯になっているさ中に講義の時刻が来る。飛び上るようにして，丸で違った世界へ心を向けねばならない。その苦しさは言語に絶する。」ガウスの嘆きが本当に聞えてくるような気がする。

19世紀の初め，1800年に生存したフランスの数学者は次のようである。

ラグランジユ（1736〜1813），64才	フ ー リ エ（1768〜1830），32才
モ ン ジ ユ（1746〜1818），54才	ポ ア ソ ン（1781〜1840），19才
ラ プ ラ ス（1749〜1828），51才	ポ ン ス レ（1788〜1868），12才
ルジヤンドル（1752〜1833），48才	コ ー シ ー（1789〜1857），11才

ガウスは当時23才で，アーベルは生前2年，ヤコービは生前4年であった。

この中でラグランジユ，ラプラスはそれぞれ解析力学，天体力学で有名であり，モンジユは画法幾何の創始者として知られている。

当時のフランスは，例のフランス大革命のさ中にあった。モンジユの画法幾何はもともと工兵学の為に発明されたといわれている。しかしそれがなかったならば，19世紀における機械の大量生産は恐らく不可能であったであろう。彼の画法幾何学は機械工学に必要なすべての用器画と，グラフの諸方法の基礎を与えているのである。

一方フーリエの熱伝導に関する古典的な研究から，彼の名に負う三角級数論が出た。任意に与えられた函数を三角級数に展開しうるという所謂フーリエの定理の厳密な研究はヂリクレによって与えられるのであるが，興味のあることに，このときフーリエはローン州の知事であった。即ちフーリエ展開の名称は当時のローン県令の名を不朽ならしめているのである。

この他，次のような記述が散見される。

コーシーは巴里において弁護士の子として生れ，卓絶せる数学上の才能は幼児すでにラグランジユの注意を惹いたといわれる。コーシーの業績の中で最も顕著なものは函数論の創立であろう。コーシーが1825年に書いた論文「虚数限界間の定積分の論」は今日の言葉で云えば，極に関する留数の定理であるが，コーシーにおいてはそれは目的の為の手段にすぎなかったのである。即ちその目的は，当時ラプラスやルジヤンドルによって計算されていた殆んどすべての定積分を，複素積分によって手際よく計算してみせることにあったのである。

コーシーは最初王党派で，新政府への忠誠を拒んで一時亡命を余儀なくされた。しかしその後，ナポレオン三世の寛容の下にソルボンヌの教授として68才の生涯を終った。しかもその間になされた論文の数は789篇といわれている。

アーベルは1802年にノルウエーのオスロに近い寒村の貧しい牧師の家に生れた。修学時代のアーベルに影響を与えた一人に数学教師のホルンボーがあり，当時の図書室の閲覧簿を見ると，アーベルの借出図書が小説紀行の類から急にニュートンの著作等に変ったのが，ホルンボーの赴任の頃と一致するそうである。

5次方程式の解法は当時の数学界の懸案であって，16世紀以来著名な数学者が必ずぶつかってみた問題であった。今ならばフエルマーの問題という所である。アーベルは1824年にその解決を得て，その成果を「代数方程式に関する論（5次の一般的なる方程式を解くことの不可能の証明）」と題する論文にまとめて，これを自費で出版したとある。貧乏な彼は印刷代を倹約するために証明を充分にする余裕がなかった。この小冊子がガウスの下へ送られて，ガウスが「よくもこんなものが書けたものだ。恐ろしいことだ」と云ったと伝えられている。アーベルの側にも手落があって，小冊子の表題に（「代数的」解法の不可能）と断らなかったという点があったが，こういった事が誇大にアーベルに伝えられた為，アーベルは終世ガウスを怨んだという。この論文はそれから2年後に完全な形で数学誌クレルレの第1巻第1号を飾って，ガウスもそれを賞賛したと伝えられている。

この他，アーベル対ヤコービの楕円函数に関する先陣争いにも興味がある。

アーベルは27才で，ヤコービは47才で，ガロアに至っては21才でその生涯の幕を閉ぢているが，その間に彼等は超一流の仕事をしているのである。

後　記

近世数学史談は昭和8年に出版されているが，私の持っていた最初の本はどうも焼失したらしく，いま手許にあるのは昭和21年の共立出版のものである。現在第3版が同社から刊行されている。　（図書館所蔵　㊫410.2;T）

実例を中心とした

資料のさがし方 —21—

今回は1981年12月までに受付けた質問からピックアップしました。「実例を中心とした資料のさがし方」も今回で21回目になりました。これまでの分はファイルにとじて参考室のレファレンス・デスクの上に置いてあります。「びぶりおてか」に連載されている「文献探索　—二次文献の利用—」と共に利用して下さい。

〔質問例　1〕

大学（又は高等教育）の教育構造についての文献を紹介して下さい。

＜回　答＞

あるテーマについて（この質問の場合は大学の教育構造）の文献をさがす場合には，目録コーナーの分類目録と各種の文献目録類が利用出来ます。分類目録を利用した場合は同志社大学で所蔵しているものしかさがせませんので文献目録類を利用した方がより多くの資料をさがす事が出来ます。文献目録などの二次資料は028に分類され教育関係は028.37にありますのでさがして見て下さい。次に大学教育に関する文献目録の主なものを紹介しますのでこれらの文献目録を調べて必要な資料をさがして下さい。いづれも参考図書室にあります。

教育学関係参考文献総覧（028.37；K）

大学教育に関する比較研究　付大学問題文献目録　1968—1971（028.377；K）

大学学生問題文献目録　1965—1971（028.377；K２）

大学に関する欧文文献総合目録　（028.377；Y）

Japanese education, a bibliography of materials in the English language（028.37；P２）

Union list of educational books located in Japan. Vol. 1 Educational books in general written in Japanese, 1868—1949.（028.37；K２）

Bibliographic guide to education.（028.37；B）

教育学・教育問題に関する雑誌文献目録　1948—1974　（028.37；N—２）

学校教育に関する雑誌文献目録　1948—1974　（028.37；N—３）

1975年以後の雑誌文献については「雑誌記事索引」（P027；Z）を利用して下さい。

〔質問例　2〕

豆腐と鉛筆の大正時代の値段がわかりませんか。

＜回　答＞

新分類目録で〝物価〟の項をさがして下さい。物価は337.8に分類されています。すると「値段の明治・大正・昭和風俗史」（337.821；S３）という資料がみつかります。これの目次でさがすと豆腐がのっています。これによると豆腐は明治41年には１銭，大正７年には２銭，大正８年には４銭，大正11年には５銭，昭和５年には５銭となっています。（東京および東京周辺の標準小売価格，100匁（375g）以上のものを一丁とした値段）鉛筆はこの資料にはのっていませんが「値段の明治・大正・昭和風俗史」は「週刊朝日」に連載されたものをまとめたもので現在も連載中との記述がありますので「週刊朝日」（P051；S８）を調べてみました。すると1980年12月19日号に〝鉛筆〟の値段がのっていました。これによると明治40年には２厘，大正10年には５厘，昭和５年には１銭となっています。

〔質問例　3〕

東京　哲学書院　1893年発行の「破那叢書　葵川信近著　北郷談」は所蔵していますか。

＜回　答＞

書名目録で「破那叢書」，「北郷談」の両方より調査しましたが見当りませんでした。「日本叢書索引」（027.4；H），「全集叢書細目総覧」（027.4；K）も調べましたが，「北郷談」を収録している全集，叢書は掲載されていませんでした。出版年が明治26年（1893）というのがわかっていますので国立国会図書館の「明治期刊行図書目録」（029.11；K4—2）で調べると国立国会図書館で「破那叢書」（全２冊）を所蔵しており，その第２集に葵川信近著「北郷談」が収録されています。同志社にはありませんが，国立国会図書館にあります。国立国会図書館所蔵の資料

ば逐次刊行物や貴重本，特別資料など以外は借出すことが出来ますのでメイン・カウンターへ申し出て下さい。

質問例３で利用した「明治期刊行図書目録」は国立国会図書館で所蔵する明治年間に刊行された図書（外国で出版された日本人および日本機関の著作を含む）が収録されています。（雑誌・新聞は収録されていません）約12万タイトルの図書が主題別に５巻にわけて収録され，別に書名索引が別巻としてあります。明治時代に刊行された図書をさがす時にはこれを利用すると便利です。

〔質問例　４〕

ある図書に木村礎著の論文「萩藩在地家臣団の分布について」が「史学雑誌」の68巻２号に掲載となっていたが「史学雑誌」68巻２号を見ても掲載されていません。

＜回　答＞

参考文献として記載された資料の掲載雑誌名，掲載巻号などの間違い（ミスプリント）は割合多くあります。この場合雑誌名か掲載巻号の間違いかわかりませんので（両方とも間違っている場合もある。又著者名が間違っている場合もある）著者名から論文をさがせる資料を利用して下さい。「雑誌記事索引―人文・社会編―」（Ｐ027；Ｚ），「雑誌記事索引―人文・社会編―　累積索引版」（Ｐ027；Ｚ３）が利用出来ます。これでさがすと木村礎の論文「萩藩在地家臣団の分布について」は62巻８号に掲載とあります。「史学雑誌」の62巻８号をみると27から50ページに掲載されています。この質問の場合は掲載巻と号の数字が入れ替ったミスプリントだったので「史学雑誌」の総目次でもさがす事が出来ます。

〔質問例　５〕

公議所日誌を所蔵している所を教えて下さい。

＜回　答＞

書名目録で調べましたが見当りませんでしたので叢書索引類で叢書に収録されていないか調査しました。「全集叢書細目総覧」（027.4；Ｋ）によると「公議所日誌」は「維新日誌」第２期第３巻に収録。「日本叢書索引」（027.4；Ｈ）によると「公議所日誌」は「明治文化全集　憲政篇」に収録とあります。「公議所日誌」が収録されている資料がわかったので書名目録でさがして下さい。「維新日誌」（210.61；Ｈ）はリプリント版が図書館にあります。これの第７巻（原本の第２期第３巻に当る）の147～248ページに「公議所日誌」が収録されています。「明治文化全集」（旧分類081；Ｙ）も図書館にあります。これの第４巻憲政篇，11～125ページに収録されています。いずれも閉架図書ですのでメイン・カウンターで請求して下さい。

〔質問例　６〕

「人虎伝」は所蔵していますか。伝奇小説です。

＜回　答＞

書名目録で「人虎伝」からさがしましたが見当りませんでした。著者名を知るために文学事典類で調査したところ「中国学芸大辞典」（920.3；Ｃ４）に〝「人虎伝」唐の伝奇小説。李景亮の作。……東洋文庫（平凡社）の唐代伝奇集，中国古典文学大系（平凡社）の六朝唐宋小説選に邦訳があり，翻案したものに中島敦の「山月記」がある。〟と記載がありました。これにより「東洋文庫」と「中国古典文学大系」に「人虎伝」が収録されているのがわかったので，これらの図書の所蔵を調べて下さい。書名目録で調べると「唐代伝奇集　２（東洋文庫）」（293.4；Ｍ），「中国古典文学大系　24：六朝唐宋小説選」（928；Ｃ）ともに図書館で所蔵しているのがわかります。「唐代伝奇集　２（東洋文庫）」をみると〝人虎伝〟という作品名ではなく〝虎と親友〟という作品名で収録されています。閉架図書ですのでメイン・カウンターに請求して下さい。「中国古典文学大系　24：六朝唐宋小説選」もさがして見ましたが〝人虎伝〟は収録されていませんでした。これは「中国学芸大辞典」のミスプリントで「中国古典文学大系」ではなく，同じ平凡社から出版されている「中国古典文学全集」の間違いです。「中国古典文学全集　６：六朝唐宋小説集」（928；Ｃ４）にやはり〝虎と親友〟という作品名で収録されています。

この質問の場合，別のさがし方として「日本叢書索引」（027.4；Ｈ）でも調べられます。「日本叢書索引」で〝人虎伝〟をさがすと「支那文学大観」，「国訳漢文大成」に収録されていると記載されています。「支那文学大観」（旧820.8；Ｓ２）は第８巻に「国訳漢文大成」（旧082；Ｋ２）は第32巻に〝人虎伝〟が収録されています。両書とも図書館にあります。

〔質問例　７〕

千葉亀雄著「日本仇討物語」の下巻（大正６年　阿蘭陀書房発行）は本学にありますか。もし本学になければ，ど

こか所蔵している図書館を教えて下さい。

<回　答>

著者名，書名の両方がわかっていますのでどちらからでもさがす事が出来ます。カード目録で新目録，旧目録とも調べましたが同志社では所蔵していませんでした。他の図書館の蔵書を調べる資料には〝蔵書目録〟があります。分類目録では新目録029，旧目録017に分類されていますので，どこの図書館の蔵書目録が同志社にあるかを知りたい時は分類目録でさがして下さい。参考室には国立国会図書館，大阪府立図書館，東京都立日比谷（中央）図書館，同志社大学（図書館所蔵図書の他に学部研究室所蔵の図書ものっています），関西大学，天理大学，関西学院大学などの蔵書目録があります。この内，国立国会図書館の目録で調べてみると「帝国図書館和漢図書書名目録 第4編」（029.11;T）に「日本仇討物語 上下巻　千葉花明　大6」がのっています。又大阪府立図書館の蔵書目録で調べると「大阪府立図書館蔵書目録」（029.2;O2—3）に「日本仇討物語　下巻　大6　千葉花明」がのっています。どちらを見ても，書名：日本仇討物語，出版年：大正6年は同じですが著者名が千葉亀雄ではなく千葉花明になっています。同一人物だと思われますが念のため千葉亀雄が千葉花明という筆名を使ったのかどうかを調べる資料として「近代人物号筆名辞典」（281.03;K4）があります。これをみると千葉亀雄は花明という筆名を使用しており，この他にも江東，零丁児，ちば生など21の筆名を使っていた事がわかります。又「日本近代文学大事典」（910.3;N7）の千葉亀雄の項目をみると著書として「日本仇討物語　上下」（大6　阿蘭陀書房）が載っていますのでこれでも同一人物とわかります。「日本仇討物語　下巻」は国立国会図書館と大阪府立図書館にあり両図書館とも貸出が可能な場合がありますのでメイン・カウンターで相談して下さい。

〔質問例　8〕

「源平闘諍録」はありませんか。

<回　答>

「国書総目録」（025.1;K）で調べると〝源平闘諍録〟の項目に写本が内閣文庫で所蔵，活字本が「未刊国文資料」に収録されているとあります。又「平家物語研究事典」（913.434;H-25）を見ると「未刊国文資料　源平闘諍録と研究」に翻刻収録とあります。「源平闘諍録と研究　未刊国文資料　第2期　141冊」（山下宏明著　1963）の所在を調べると図書館にはありませんが，国文学研究室で所蔵しています。又国立国会図書館でも所蔵しています。

く　り　ご　と

十年一昔というけれど，二昔も前の図書館を，時々なつかしく思い出す。

レンガ建ての旧図書館は，夏でも建物の中へ入ると，ヒヤリと冷たさを感じた。冬になると，書庫の中は冷蔵庫の様に冷えきり，納本作業等で長時間書庫に入っていると，体のシンから冷えたものだ。冬期の，朝一番の仕事は地下室へ行って炭をとってきて，火をおこし，カウンターの足元の火鉢に炭火を入れることであった。書庫の納本と言えば，階段の上り下りは，長いお盆に本を山の様に積んで運んだものだ。今の若者にこんな事を言うと「ウッソー」なんて言葉が返ってきそうだ。

今や全館冷暖房完備，書庫のキャレルで読書もでき，AV室では音楽を聞き，地下の読書室では楽しく語り合うこともできる。新年度からはブック・ディテクションが導入され，開架図書室への荷物の持ち込みが可能になる。そして，いよいよ図書や雑誌の整理の，電算機による処理が始まろうとしている。何年か後には，電算機により，各地の図書館と連携しつつ，相互利用ができることも，夢物語ではないであろう。

こんなに近代的な，設備のととのった図書館で働きながら，何故か，旧図書館時代の，一歩図書館へ足を踏み入れると，水を打った様な静けさの中で，一心不乱に勉学する学生の姿がなつかしく目に浮ぶのである。

2万人の学生をかかえる同志社の図書館が，情報の氾濫の中で，資料を適切に処理し，利用者に提供し，又管理するためには，機械化することは必然であり，抗しきれない時代の流れでもある。又，特定の学生のみでなく，多様な学生によって利用される図書館になったことは喜ばしいことではある。

しかし，より多くの学生・教職員に利用される図書館であると同時に，学問をする場にふさわしい，図書館の姿も失ってはならないのではないだろうか。

（河内谷美知）

ブック・ディテクション・システム（B.D.S.）について

＜はじめに＞

1973年12月に新図書館が開館して以来，一階の開架閲覧室，雑誌・参考図書室，二階の第２閲覧室，第３閲覧室を利用するためには，先に持物をロッカーに入れ，メイン・カウンターを通るのであるが，持ち込める私物の図書は三冊以内に限られ，持物は係員に見せてほしい旨を掲示していた。そのためメイン・カウンターには持物チェックの係員が常時一名必要であり，利用者が多い当館としては専任の要員確保は無理で，兼務をしなければならない状態であった。

ヨーロッパや米国の図書館では，利用者が退館する時に鞄などの持物をあけて係員のチェックを受けるのが通例で，それが社会的常識となっている。しかし，日本では他人に持物を調べられるのも，調べる方もいやがる傾向のようで，たまに鞄を持って入った利用者に中を見せるように指示をすると明らかに不快な顔をする人が多いものである。これまで一階，二階計453席に対し，ロッカー624個を備えて利用者に供してきた。しかし，ロッカーを私物化して鍵を持ち帰るものが多く，約200個は使用できないのが常態であった。そのため，試験時期の６，12月には必ず使用不能の鍵を取替えていた。しかもロッカーの修理・点検は午前９～10時（開架図書の納本整理時間帯）や月末休館日に限られるため充分な点検は困難であった。

利用者から口頭や投書でたびたび制限冊数に対する苦情が寄せられていた。例えば法学部学生からは六法，判例集，教科書，参考書の四冊は必要であり，もし三冊以内までであれば図書館の利用を拒ばまれているのと同じようなものであるとか，また一冊の図書を借りるためにも持物をいちいちロッカーに収めなければならないなどである。

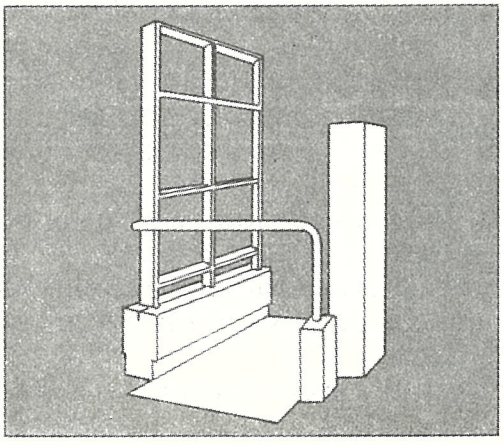
図書を返却して，同じものをもう一度借りたい場合に，荷物とコートをカウンターに置いて手続きをする学生をよく見かけたものである。

＜持物チェックの機械化＞

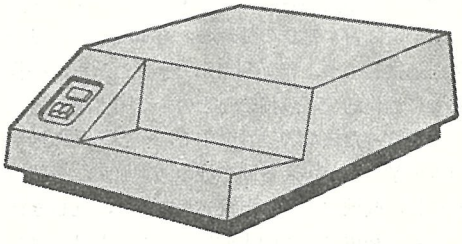
図書館管理の面から持物チェックの機械化とロッカー管理の省力化，又利用者サービスの面からは煩雑な手続きの省力化のために，1982年３月10日以後B.D.S.を導入してチェック・システムを機械化することになった。B.D.S.について既に1981年５月12日付京都新聞（夕刊）に次のように紹介されている。『この図書管理方法はブック・ディテクション方式と呼ばれ，アメリカで開発。本（中略）に特殊磁気テープを接着。貸し出し手続き時にこの磁気を消す。しかし手続きをせずに本を持ち出そうとすると，消されていない磁気が図書館出口に設置された磁気と反応して警報が鳴り，出口の回転式金属アームも閉まると，いう仕組み。（後略）』

重複するが，業者のパンフレットの説明によると，センシング装置と呼ばれる機器が，手続きのすんでいない本に貼り付けられたテープの低周波特殊信号を探知して警報を出す。又，ブック・チェック・ユニット機器が0.1秒たらずで磁気を付けたり，除いたりする。

わが国では1975年４月に筑波大学体育芸術学群図書館を皮切りに，すでに40数大学がこの装置を導入している。京



センシング装置



ブック・チェックユニット

都でも1980年から龍谷大学図書館，佛教大学図書館，立命館大学図書館，でそれぞれ導入されている。因みに米国では1970年にセント・ポール・パブリック・ライブラリーに設置されて以来，約2,000のシステムが図書館に設置され，1979年には6,000以上に増加しているそうである。種類も5種類あるが，日本では一種だけなのでシステムを選択する余地はないようである。

＜B.D.S.導入経緯＞

1980年4月にチェック部分を通過する入室者がノーチェックの地階部分を利用する者より漸増してきていること，ロッカーを利用して入室する方式では試験期の利用者の激増に対処できないことからブック・ディテクションを導入してはとの意見がでて，9月に閲覧課で検討委員会を設けた。

次の表は本館の年間入館者数の推移であるが，持物のチェック部分（1～2階）がノーチェック部分（地階）より漸増している。

年度	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980
地階（ノーチェック部分）	592,017	686,992	687,490	699,352	692,907	669,575	662,679
1～2階（チェック部分）	504,893	551,284	561,600	597,847	662,612	663,232	714,246

問題としては，1）貸し出しと返却時に作業手順が増え，しかも日常業務としてのテープ取付け作業が増えるため省力化にはならないのではないか。2）利用者が自由に出入りでき，入館者が増えることだけがサービスといえるかどうか。読書，調査の場が自習室になる傾向が多くなるのではないか。3）試験期などの繁忙時に，貸出しと返却の対応ができないのではないか。4）本館では，机の下に荷物置きがなく，B.D.S.を導入してもロッカーは必要であろう，などというものであった。館内で8回の座席利用状況調査，既設館の見学調査，別に31館にはアンケート調査，その他の検討を踏まえたうえ，機関に諮り設置を決定した。1982年2月23日から，機器据付，初年度65,000冊のテープ取付け作業を行い，3月10日から稼動することになった。

＜おわりに＞

B.D.S.導入の長所は利用者がロッカーを使わず自由に閲覧スペースに出入りでき，出入口における持物チエックを受けなくてすむことである。短所は借出し・返却の時，磁気の入・消去作業が必要なため利用者を少し待たせることなどがある。

当館のように試験期にも図書の貸出しをしているところでは，テープの取付けと磁気の入・消去作業を比べると省力化にはならない。しかし，大学図書館として利用者優先のサービスを行おうという姿勢と努力は生かされると思う。

省力化を計るためには現在の手作業で行っている貸出し，返却業務を機械化する以外にはないわけで，B.D.S.は当館の業務機械化の端緒であり，先がけであると思っている。（島田　繁）

利用者へのお願い

B.D.S.のゲートを通過される利用者は，以下のような点に留意して協力して下さい。

1. 出口と入口を間違えないようにして下さい。間違えた場合は，バーを無理に押さないように注意して下さい。（逆方向には動かないようになっています。）また，ブザーがなった場合も同様にバーを無理に押さないで下さい。
2. 警報が間違って鳴る場合もありますので，その時は気を悪くされず係員の原因調査に協力して下さい。誤報の原因としては，折りたたみ式の傘が最も多いようです。
3. 荷物の置き場所に注意してください。（荷物で隣席を確保するようなことはしないで下さい。）

仏教に関する二次文献

今回は，仏教・仏教学関係の調査資料を紹介します。残念ながら，この方面の資料，特に書誌類は，本学にはあまり多くありません。いきおい，辞典，事典の類に頼らざるを得ません。又，他大学，特に仏教系の大学の参考図書目録などを活用して，書誌類をさがして見ることも一法です。

〔1〕 仏教，仏教学一般

1. 仏教学関係雑誌論文分類目録 2冊

竜谷大学図書館編 竜谷大学出版部刊 昭6—36 (㊫028.18;RA)

第1冊は明治から昭和5年までに雑誌に発表された仏教関係の論文の目録で，約15,000件を収録しています。収録した雑誌の目録と，著者および，件名の索引をそなえています。第2冊は，昭和6年から30年までの論文，約27,000件を収めています。

2. 仏教学関係雑誌論文分類目録

竜谷大学仏教学研究室編 永田文昌堂 昭47 (㊫028.18;R)

前記の続編で，昭和31年から44年までの間に発表された論文，約9,300件を収録しています。

3. 宗教に関する10年間の雑誌文献目録

日外アソシエーツ編 昭53—54 (㊫028.16;N)

昭和30年から39年に至る10年間の宗教関係論文を収めたものが昭和54年に刊行され，その続きに当る，昭和40年から49年までの10年間の分はそれより先，昭和53年に刊行されました。それぞれ約11,000件の論文を収録しています。仏教関係の論文が大半を占めています。巻末に，収録雑誌一覧表と，事項（主題および人名）索引があります。

4. 教化に役立つ仏教文献解題

桜井秀雄編著 同朋舎 昭55 (㊫028.18;S)

全体を3部門に分け，第1部で禅関係文献，第2部で仏教関係一般，第3部でその他宗教関係文献を，解説しているものです。教化に役立つと云う冠称を特に意識する必要はありません。一般的な解題として役に立つものです。巻末に著者名索引をそなえています。

5. 仏教の名著12選

笠原一男編 学陽書房 昭48 (㊫028.1;K2)

聖徳太子の三経義疏から，明治の真宗思想家，清沢満之に至るまでの主要な仏教者12人の代表的な名著について，詳しく解説したもので，仏教書の入門書と云えます。

6. 仏教の思想 全12巻

塚本善隆等編 角川書店 (㊫180.8;B)

仏教を思想として捉えた全集で，インド編，中国編，日本編に分かれています。各巻末に，簡単な解説を付した参考文献のリストをそなえています。文献リストは，一つの文献と，それに関する注釈書，入門書等が紹介され使いやすいものになっています。

7. Buddhism in India, Ceylon, China, and Japan; a reading guide.

Hamilton, Clarence H. 編 The University of Chicago Press, 1931. (㊫F028.18;H)

欧文で書かれた仏教に関する文献の解題です。ケリー文庫の一冊です。

8. 仏書解説大辞典 全12巻

小野玄妙編 大東出版社 昭8—11 (㊫016.25;O)

昭和7年10月までに刊行された，邦文，漢文，欧文の仏教書約65,500種を，書名の50音順に配列して，解説を加えた辞典です。内容は，(1)蔵経，(2)全書類，(3)単行の古写本および古刊本，(4)現在の単行本，(5)古逸書にわたり，その一々について，題名，書名とその読みかた，巻数，著者とその生没年代，著作年代，訳出年代，内容についての解説，注釈書，写刊年月，現所蔵者，発行所を記してあります。また図書館所蔵のものについては，その館の請求番号を示してあるので，所在目録としても有用です。

〔2〕 仏 典

1. 仏典解題事典

水野弘元等編 春秋社 昭52 (㊫028.183;B)

第１章・一切経（３種類）　第２章・インド仏教（124部）第３章・チベット仏教（19部）第４章・中国仏教（101部）　第５章・日本仏教（113部）　第６章・仏教以外のインドの聖典類50部，計410部について，解説がつけられています。

尚，新仏典解題事典（㊫028.183；S）は，新という冠称ではありますが，この書の旧版です。

2.　仏教経典散策

中村元編著　東京書籍　昭54　（㊫183；N）

厖大な仏典の量にくらべて，取上げられた量は少なく，17件ですが，日本で古来，よく読誦されている経典は，ひと通り収められ，詳しく解説されています。又さらに，大正，昭和になって，南アジアの原典から訳出された仏典についても，よく読まれているものが取上げられています。

3.　竜谷大学所蔵大清三蔵（竜蔵）目録

竜谷大学図書館編　昭38　（㊫028.183；R）

中国清朝の王室によって開版された，大蔵経の目録です。

4.　西蔵大蔵経総目録　２冊

東北帝国大学法文学部編　昭９　（㊫253；T２）

東北大学所蔵の西蔵大蔵経の目録です。西蔵語と梵語の索引がついています。

5.　解説大日本校訂大蔵経

重田勘次郎著　大日本校訂大蔵経発行所　昭12（㊫253；S８）

明治14年から18年にかけて刊行された大日本校訂大蔵経（所謂，縮刷大蔵経）にもとづいて書かれた解題です。この種の解題としては詳しいものと云えます。

6.　大谷大学図書館蔵西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録

大谷大学図書館編　昭51　（㊫028.183；O）

大谷大学で所蔵している，北京版西蔵大蔵経の中の丹殊爾（タンジュール）すなわち論部について，その目録をその本文と，他種の大蔵経（漢訳　梵文等）によって比較校訂し，異同を対照した目録です。以前に甘殊爾（カンジュール）すなわち経，律部についてのものが刊行されていますが，本学には所蔵していません。

7.　大日本続蔵経目録

前田慧雲原編　中野達慧増訂　蔵経書院　昭42（㊫128.183；D）

大正元年刊の複刻版です。蔵経書院が，明治38年から大蔵経についで編集刊行した，続蔵経の目録です。

〔3〕仏　教　史

1.　アジア仏教史　全20巻

中村元等編　佼正出版社　昭47―51　（㊫180.2；A）

Ⅰ・インド編　Ⅱ・中国編　Ⅲ・日本編の３部に分かれています。各巻末に参考文献のリストが付いています。

2.　仏教史年表

山崎宏等編　法蔵館　昭54　（㊫183.3；B10）

仏教史全般にわたる詳細な年表です。巻末に人名索引などがついています，

3.　日本仏教史辞典

大野達之助編　東京堂　昭54　（㊫180.21；N５）

仏教に関する，人名，書名，宗派名，件名，用語等の主要なものを集めた辞典です。専門研究者向きには不十分で，いわば一般向きといえます。巻末に，索引があります。

〔4〕各　宗　派

1.　仏教宗派辞典

金岡秀友編　東京堂　昭49　（㊫188；B）

仏教の行われた，全ての地域に行われた各宗派について，その発生，歴史，教義等を解説した辞典です。

2.　密教関係雑誌論文目録

夏目祐伸編　文政堂　昭50　（㊫028.188；N）

明治から，昭和40年に至る間に発表された，密教に関する雑誌論文約5,000件を収録しています。

3.　真言密教霊雲寺派関係文献解題

三好竜肝編著　図書刊行会　昭51（㊫028.188；M）

真言宗宝林山霊雲寺派に関する著作と，所謂宝林学派関係の文献の解題です。

4.　真言宗年表

守山聖真編　図書刊行会　昭48　（㊫188.52；S２）

昭和８年刊のものの複製です。弘法大師誕生から，昭和６年までの詳細な年表です。

5. 昭和現存天台書籍綜合目録　増補版

渋谷亮泰編　法蔵館　昭53　（㊞028.188；S）

中国の南嶽天台大師から，日本の現代に至る，文献約三万余件を収めた目録です。旧版は昭和15年から18年にわたって刊行されたものです。

6. 密教大辞典　増訂版

密教辞典編纂会編　密教大辞典再刊委員会増訂版編　法蔵館　昭43―45　（㊞188.5；M）

難解なことで知られている，密教の教義，儀式，著名僧の史伝など，密教に関するあらゆる事項を説明しています。

7. 密教辞典

佐和隆研編　法蔵館　昭50　（㊞188.5；M３）

インド後期密教から，チベット，蒙古のラマ教，そして日本に至る密教の事項を収め，欧米の研究についても収録しています。ただ，天台密教に関しては多少簡略になっています。

8. 最澄辞典

田村晃祐編　東京堂　昭54　（㊞188.42；S）

伝教大師最澄に関する辞典です。巻末に参考文献リスト，最澄年表，最澄法系図，最澄関係地図等があります。

9. 仏教大学図書館所蔵和漢書中浄土宗学関係書籍目録稿

仏教大学仏教文化研究所編　昭55（㊞028.188；B）

浄土宗および，浄土宗学に関する図書のほか，直接宗旨と関わりはないが，広い意味でつながりのある余乗外典の類をも収録しています。

10. 真宗年表

大谷大学編　法蔵館　昭48　（㊞188.7；S４）

親鸞の生れた，承安３年から，明治８年に至る詳しい年表です。巻末に索引があります。

11. 親鸞辞典

菊村紀彦編　東京堂　昭53　（㊞188.72；S２―25）

親鸞に関する辞典です。巻末に参考文献リスト，年表等がついています。

12. 日蓮辞典

宮崎英修編　東京堂　昭53　（㊞188.92；N―９）

日蓮に関する辞典です。巻末に，参考文献のリスト，日蓮年表，足跡図があり，付録として日蓮宗諸門流系譜図がついています。

13. 日蓮聖人事蹟辞典

中尾堯編　雄山閣　昭56　（㊞188.92；N―11）

日蓮の伝記辞典です。巻末に略年譜があります。

14. 明治・大正・昭和日蓮門下仏家人名辞典

河村孝照監修　図書刊行会　昭53　（㊞188.92；M）

15. 石井積翠軒文庫善本書目

川瀬一馬編　臨川書店　昭56　（㊞028.188；I）

石井光雄氏の集めた，禅籍中心の文庫の目録で，古写本，古版本，自筆本等，555点を収録しています。

16. 禅籍目録

高田儀光編　駒沢大学図書館　昭３　（㊞016.267；T）

駒沢大学図書館所蔵の文献を中心にした禅関係の文献目録です。この書の増訂版が，昭和37年に刊行され，昭和の文献が収録されていますが，残念ながら本学には所蔵していません。

17. 禅学大辞典　３冊

大修館　昭53　（㊞188.8；Z２）

禅門用語を中心とし，その他に禅宗関係の人名，地名，書名，寺院名など百科項目をも収録しています。書名は，禅に関する刊本および，写本，その他，近時発見された敦煌文献などのうち，禅に関するものを収めています。

18. 禅林名句辞典

飯田利行編著　図書刊行会　昭50　（㊞188.84；Z２）

禅籍中の名句を，言別（字数），韻別に並べ，その出典，読解，転義等について解説したものです。

19. 禅語小辞典

佐橋法竜著　春秋社　昭53　（㊞188.8；Z３）

禅学用語を中心とした辞典です。

20. 道元辞典

菅沼晃編　東京堂　昭52　（㊞188.82；D―９）

道元に関わる事項を集めた辞典で，巻末に年表がついています。

〔５〕 寺院誌　仏家

1. 慶応義塾図書館所蔵寺社略縁起解題

慶応義塾大学三田情報センター編　昭56（㊞028.185；K）

2. 印度仏教固有名詞辞典

赤沼智善編　法蔵館　昭42　(㊐180.3;Ⅰ)

主として漢巴の五部四阿含，漢巴の諸律典，大正蔵経の本縁部から収録しています。その他必要な場合には，印度の古典文学からも採録しています。

3. 大日本寺院総覧

堀由蔵編　名著刊行会　昭41　(㊐185;D)

大正5年刊行のものの複製です。当時の各宗寺院71,000寺院とおもな境外仏堂200余を行政区画順に収め，寺院名，宗派，等級，山号，所在地，別名，俗称，寺格，開創次第，開山，沿革，本尊等々について記してあります。

4. 全国寺院名鑑　第3版

全日本仏教会寺院名鑑刊行会編　昭48

(㊐185.91;Z)

全国の各宗派の寺院を府県別に音順に並べた名鑑です。巻末に各宗派宗務所一覧表，東京出張所一覧表，本山一覧，門跡寺院一覧があります。

5. 東大寺辞典

平岡定海著　東京堂　昭55　(㊐185.916;T－7)

八宗兼学の道場と云われた東大寺に関する事項をあつめた辞典です。

6. 日本仏家人名辞書

鷲尾順敬著　光融館　明44　(㊐982;W4)

仏教伝来以来明治までの諸宗の僧尼・仏工・絵仏工等約6,000人の伝記を集め，法諱の50音順に配列した辞典です。一々出典をあげ肖像も収めてあります。付録に日本仏教略沿革・歴代天皇・皇后・皇子受戒表・日本仏家年表・各宗系統図・奈良時代平安時代仏家や位階官職表・諸宗門跡歴代・諸大寺歴代並びに諸職次第・勅号諡号索引・略称略名索引・禅僧別号室名索引などがあります。

7. 古寺名刹大辞典

金岡秀友著　東京堂　昭56　(㊐185.91;K2)

古い由緒を持つ寺院といろいろな意味で名高い寺に限られています。

8. 鎌倉廃寺事典

貫達人　川副武胤著　有隣堂　昭55

(㊐185.913;K)

鎌倉市史編纂の際に調査された結果をまとめたものです。

〔6〕辞　典　事　典

1. 望月仏教大辞典　3版

望月信亨編　世界聖典刊行会　昭29―88

(㊐180.3;M2)

仏教に関する術語・名数・経名・仏名・行事・宗名・地名・寺名・人名・役職名・動物・植物等あらゆる項目を収め，一宗一派にかたよらず詳細に解説した大辞典です。辞典本文の他に，年表・和漢語索引・西蔵語索引・仏教分布地図・梵語索引・巴梨語索引があります。

2. 仏教大辞彙

竜谷大学編　冨山房　昭10　(㊐180.3;B6)

印度・中国・日本の仏教各宗の教義制度をはじめ，人名・地名・動植物等，仏教に関係ある語彙を網羅した辞典です。意義，各宗派の解釈，出典等を示してあります。

3. 仏教大辞典　複刻版

織田得能著　名著普及会　昭52　(㊐180.3;B8)

典拠・引用が豊富で，特に国文の古典を出典とするものが多く，国文学研究に必須のものです。

4. 仏教語大辞典　3冊

中村元著　東京書籍　昭50 (㊐180.3;B7)

普通名詞を中心とし，固有名詞は原則として省いてあります。第3巻は索引編で，出典略号表，画数索引，五十音索引，チベット語索引，パーリ語，サンスクリット語索引が収録されています。

〔仏教関連事項〕

1. 仏教美術文献目録

UNESCO 東アジア研究センター　仏教美術調査専門委員会編　中央公論美術出版　昭48 (㊐028.702;U)

昭和35年から44年までの間に発表された仏教美術に関する文献の目録です。定期刊行物のみでなく単行の文献も採録されています。

2. 仏教儀礼辞典

藤井正雄編　東京堂　昭52　(㊐186;B)

葬祭等のマナーなどだけでなく，仏教儀礼全般にわたっての詳しい辞典です。

3. 仏教文学辞典

武石彰夫　菅沼晃編　東京堂　昭55　(㊐180.3;B11)

インド，中国，日本の仏教に関連する文学の辞典です。時代は古代から近代にまでわたっています。巻末に索引があります。

貸出しについて思うこと——

聞くところによると図書の貸出しについて期間，冊数，手続きとも「わからない」人が多いようである。本館では貸出し冊数は

大学院生……5冊（開架四冊まで）　2週間

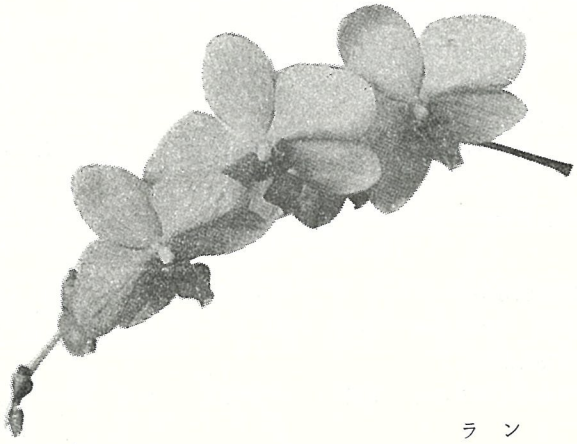
学部学生……4冊（　　〃　　）　1週間

となっている。また，大学院生には禁帯出図書を除いた閉架図書について12冊3カ月以内の特別貸出しを行っている。貸出し手続きは登録者台帳，貸出証，ブック・ポケット，ブック・カード，返却期日票を使用するいわゆるニュー・アーク方式によっている。貸出し冊数については1973年の旧図書館時代まで学部学生2冊，大学院生3冊以内となっていたのを，新館移転後に現在の冊数にした経過がある。

本来，利用者に貸出す冊数や期間の制限は，できるなら無い方がよいのだが，大学という一定年限在学する利用者を対象とする場合，ある程度の制限を加えざるを得ない。とりわけ，利用目的がカリキュラム関連科目に限定される傾向のあることと利用時期が集中するため，資料の回転率をよくして量的な不足をカバーせざるを得ないことになる。そのために，貸出期間は最低限の1週間という実状にあるといえる。このような制限のもとで，本館では，平常時には一日平均700冊位，試験期には一日平均1,300冊位が貸出されている。昨年のレポート試験実施の時には一日平均2,230冊が借り出され，ピーク時に一日3,245冊という日があった。返却される図書を入れるとこの数字の倍ぐらいの図書が動いていることになる。試験期には貸出しをしない図書館もあるが，本館では常に貸出しをしているためか，他大学と比べても貸出し冊数は群を抜いて多い。それだけに試験期には，貸出しと返却だけで10人位の人員が対応している。利用者の集中時には，貸出し，ブック・カードの配列と返却図書のブック・カードを引抜いてブック・ポケットに納める作業に5～6人の館員が追われることになる。

利用者からすれば，貸出しについては現状でよいということになるのかも知れないが，少くなくとも貸出し手続については機械化を計り，省力化すべきだと考えている。貸出しと返却業務に追われて，カウンターから一歩も出られない受身のサービスから，省力化によりその余力を積極的なサービス，具体的にはレファレンス・サービスを中心とした業務の充実に向けるべきだと思っている。大学のカリキュラムとも関連するが，日本ではまだまだ資料の充分な利用方法を身につけていない学生が多い。閉架図書のあることを知らなかった人や，利用したことのない人が多いようである。少くなくとも，開架図書が資料のすべてだと思わせるようなことのないようにすべきだと考えている。

（島田　繁）



ラン

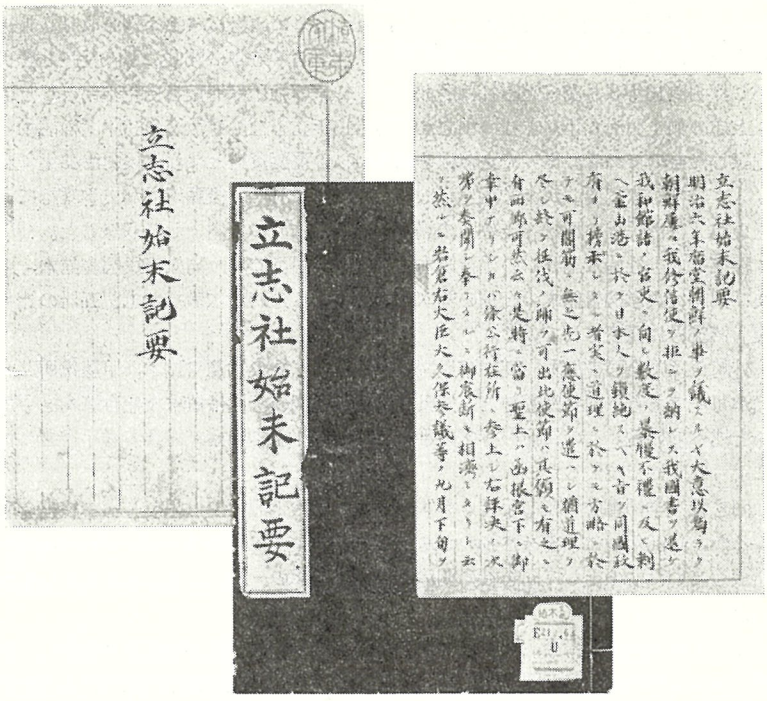
ピックアップ

植木枝盛著「立志社始末記要」について

同志社大学図書館に植木枝盛――土佐の民権論者として有名（1857―1892）――が生前所蔵していた図書で編成されている植木文庫がある。この文庫は明治26年6月片岡健吉等によって植木枝盛を記念して同志社に寄託された。冊数は813冊で全て和書で構成されている。当時の図書目録（明治26年6月調製）が幸いにも保存されているので寄託図書の状況が一目で解明される。この文庫は新図書館の完成（1973）と共に別置され，冊子目録が刊行された。

当初813冊あった植木文庫も約90年の間に134冊の欠本を生じた。欠本の中に植木枝盛の自筆稿本と見られる「立志社始末記要」と「植木枝盛略伝」の2冊が含まれていた。何れも重要な資料であるがため，それらの欠本は非常に残念であった。

片岡健吉日記によると「立志社始末記要」と「植木枝盛略伝」は明治27年高知に借り出され，第二次世界大戦のさなかアメリカ軍による空襲により，高知で家屋と共に焼失したものと思われていた。



然し世の中は不思議なもので昭和53年7月6日の夜高知の外崎光広教授（昭和28年同志社大学大学院法学修士）から，「立志社始末記要」が東京の明治古典オークションカタログに掲載されているという電話を受けた。聞けば楕円形の植木文庫印が朱色で捺印されているので間違いなく，同志社大学図書館にあった植木文庫のものと判断し，早速購入手続をとった。数人の購入希望者があったが，もともと同志社の所蔵であった事を説明してもらって，やっと同志社大学図書館が購入した。

この古本市がオークション（入札）であったがため，元の古巣である同志社大学図書館に帰ることが出来た。普通の古書即売会であれば他人の手に渡り，再び日のめを見ることはなかったであろう。外崎氏が述べていられるように正に奇跡的に取り戻されたというべきである。

「立志社始末記要」は植木枝盛日記によると明治18年6月21日の項に「一ケ月程前より，立志社始末を書す。」と記入されている。従って明治18年5月から6月にかけて作成された。

本学所蔵の「立志社始末記要」は写真の如く表紙は模様のある黒い和紙で和とじされて，表紙の左上に「立志社始末記要」と墨書されている。本文は縦25㎝横18.3㎝，和紙24行の青罫紙に毛筆で墨書された122枚の二つ折袋とじである。中表紙中央に「立志社始末記要」と墨書され，大型楕円形の植木文庫印が捺印され，さらに墨書の右側に「片岡」なる印影があるが，これは植木文庫の他の本にも捺印されている片岡健吉の印影である。筆跡は植木枝盛のものか片岡のものか或いは植木又は片岡が筆生に筆写させたものか判断に苦しむ所である。植木枝盛の署名は何処にもない。本文は美しく，よごれもなく加筆も注記もなく，一部に字の訂正がある。保存状態は非常に良好である。従って植木枝盛の自筆草稿でないことは当然と思はれる。しかし自筆草稿は未だ発見されていない。本学所蔵の「立志社始末記要」は明治26年6月以前に筆写され，明治26年6月同志社に寄託された事が確認出来るのみである。

「立志社始末記要」の内容は前文例言に「本編立志社創設ノ事ヨリ其社会ニ出入シ天下ニ形影スルノ概概ヲ敍シ前後十年間ノ経歴ヲ掲明ス」と述べている。

すなわち明治6年10月征韓論に破れた板垣退助は明治7年1月副島種臣，後藤象二郎等6名と共に民選議院設立建白書を左院に提出した。3月高知に帰り4月片岡健吉，林有造等と立志社を創立した。立志社は創立当初土佐の人々に自主の精神をもつようにつとめたが，具体的には士族授産，救済に尽すと共に教育のため学校を設立した（立志学舎）。明治10年立志社社長の片岡健吉は国会開設を天皇に建白するために京都行在所に出頭したが阻止された。

そのため立志社はその建白書を印刷して全国に頒布した。これが一つの契機となって多くの民権論者が高知の立志社を訪れた。立志社は次第に民権運動の中心となって活躍することになった。機関誌「土陽雑誌」「海南新誌」を刊行し，演説会を各地に開催した。

立志社は民権運動を全国的に拡大した。この運動が実を結び明治11年9月大阪で愛国社再興大会が開かれ，明治13年3月大日本国会期成同盟が結成された。明治14年10月2日国会期成同盟第3回大会で自由党が結成され，盟約・規則・役員・全国組織をもった日本最初の政党が誕生した。機関紙「自由新聞」を発行した。

民権運動の活発化に恐怖した政府は明治13年4月5日集会条例を公布して民権結社と民権運動に対する弾圧を強化した。明治14年10月12日に政府は国会開説の勅諭を発した。

立志社は政府の弾圧を避けるために集会条例の適用を受ける政談部を独立させた。然し政府の弾圧はますますきびしくなり定期演説会の認可も困難になり，且つ6月に政府は集会条例を改訂し弾圧を強化した。立志社は主趣・規則を廃止し，立志社掟をつくり「文武両道の稽古。諸事遊戯の開催，懇談親睦」を目的にかかげたが，政府の弾圧はきびしく明治16年3月20日立志社は解散した。従来の社局は海南自由党本部となり後楽館とよばれるようになった。

上述の如く明治6年立志社の創立から明治16年立志社の解散迄の10年間の活動と関係人物等を関係文書より克明に記録したものである。従って立志社を知るための重要資料となり，後明治43年に刊行された自由党史に使用された。

「立志社始末記要」が全文活字になったのは昭和31年で後藤靖氏が史学雑誌に掲載した。その後昭和45年に平尾道雄氏が「自由民権の系譜―土佐派の場合」（単行本）に資料として収録した。

現在「立志社始末記要」の手書き本として国会図書館本，高知市民図書館本，甲藤勇氏所蔵本，高知県立図書館本及び同志社大学図書館本の五種の写本が存在する。外崎光広教授が上記五冊の比較検討を高知短期大学「社会科学論集」第36号に発表されている。

外崎氏は国会図書館本，高知市民図書館本と同志社大学図書館本，甲藤氏所蔵本，高知県立図書館本の二系統に分類が可能であり，国会図書館と高知県立図書館所蔵の写本は植木枝盛自筆本を手本にして筆与されたのではなかろうかと述べている。この二冊の写本の手本となった「立志社始末記要」（手書き）は昭和20年のアメリカ軍による空襲によって高知で焼失した。

同志社大学図書館所蔵の手書きの写本「立志社始末記要」は果して植木枝盛の自筆本かどうかという疑問が生じてくるが，約90年前に手書きされたが故にその間の事情は不明である。ただ明治26年以前に写本され，植木枝盛が生前所蔵していたものとして同志社に明治26年植木文庫の一冊として寄託された。五冊の中で最も古く，当時に手書きされた写本である。

従って今後憲法や国会，及び民権運動に関する記念展示会が開催される場合，展観の希望が同志社大学図書館に寄せられるであろう。旧帝国憲法公布100年記念日や国会開設100年記念日はまもなくやってくる。

「立志社始末記要」は今後一般の人々の目にふれることの多い重要な文献資料である。

〔参考資料〕　植木枝盛著「立志社始末記要」　外崎光広著　（210.63；U―1a）
高知県歴史辞典　高知市民図書館発行　（218.4；K２）
植木枝盛研究　家永三郎著　岩波書店発行（289.3；U7―1a）

（大西友三郎）

“びぶりおてか”　同志社大学図書館報　№31　1982年4月1日　発行
発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 251―3971
編集責任者　川　上　皓　市（図書館庶務課長）　印刷　芳文堂印刷所